

## 和田芳恵小論

### ——一葉研究を中心に——

青木 一男

#### 一 はじめに

「日本芸術院賞」「日本文学大賞」や「直木賞」その他の賞を受けた作家和田芳恵が亡くなって九年になる。生前の氏は樋口一葉研究の第一人者として知られていた。しかし、氏は作家としての業績も数々残されていた。没後、全五巻の全集も刊行されている。また、氏を追悼する書物が刊行されたり、氏を研究する人もかなりいるようである。私も、氏の教えを受けた者の一人として、氏の歩いた道をたどってみたいと思うのである。牛の歩みではあるが、歳月をかけて和田芳恵に迫っていきたいと願っている。

本稿では、和田芳恵の果たした三つの仕事と、その仕事のうちの「一葉研究」について陳述してみたいと思う。

#### 二 和田芳恵——その三つの顔——

和田芳恵は、昭和五十二年十月五日に亡くなった。『週刊新潮』八月二十日号Vの「墓碑銘」のコーナーでは、その死を悼んで、訃を伝えている。冒頭に、

和田芳恵さん——といっても文学にさほど関心を持たない向きには、決して耳なれた名前ではなかったに違いない。

が、わが文学界における、この人の業績は赫々たるものがあった。(下略)

と書いている。私は国文の教師であり、文学研究者の末席にいる者ではあるけれども、私が和田芳恵を知ったもの、小説家和田芳恵としてはなく、一葉研究者としてであった。

和田芳恵は亡くなる直前まで『読売新聞』の夕刊に「自伝抄」を連載していた。「自伝抄」は文字通り、知名人が自分の過去を回想して抄述するシリーズであった。で、氏はその十九回(昭和五十二年八月三十日付)の中に、

私は、現在、抗生物質をのんでいるが熱はさがらない。来週から

は別な会社の製品に代えることになっている。抗生物質は連用すると効かなくなるので、これまでも幾度か取りかえてきた。このよう  
な、ゆるやかな速度で、死に近づいてゆくのを、私は夜中などに独  
りで考えることがある。

という文章があつて、思わずひやりとさせられる思いがあつた。しか  
し、その後、

私は来年三月に「群像」の長編小説の第一回を渡すことになつて  
いる。これを終わるまでは、どうしても、一年以上はかかるはずで  
ある。この仕事を、いのちの綱にして、二年後まで生きのびようと  
思っている。

とあるのを見ると、まだまだ創作を命の綱に生きていこう、書いてい  
こうという強い意志を汲みとることができ、和田は今まで病身であつ  
ただけに、これからも体を労わりつつ、いい仕事を続けることであら  
うと思つたのである。ところが、十月五日の夕刊に、その訃が伝えら  
れた。

## 老境の官能

作家 和田芳恵氏死去

一葉の研究などで知られる作家和田芳恵氏が五日午前一時三十二分、十  
二指腸カイヨウのため、東京都大田区上池台一の二九の八の自宅で死去。  
告別式は十二日午後二時から三時まで東京築地の本願寺で。喪主は妻 静  
子さん。

和田さんは十二指腸カイヨウの検査のため先月十九日から川崎市の太田

総合病院に入院していた。四日午後、検査が終わり、近く東京・世田谷の  
久我山療養所に入院するためいったん帰宅したところ夜中になって突然病  
状が悪化した。

北海道長万部町生まれ。北海中学を経て中央大学法学部を卒業後、新潮  
社の編集部に入る。昭和十六年に退社後文筆生活に入る。二十二年には文  
芸雑誌「日本小説」を主宰、いわゆる「中間小説」の名づけ親となるが、翌  
年には廃刊。樋口一葉の研究に打ち込み、二十七年秋から筑摩書房版「一  
葉全集」全七巻を編集、三十一年六月に完成。三十一年「一葉の日記」で  
第十五回日本芸術院賞を受ける。三十八年に「塵の中」で第五十回直木賞  
を受賞、作家として遅い文壇登場となった。五十年には「接木の台」で第  
二十六回読売文学賞を受賞してから、『老境の中の官能の美』を描き、肺  
気シユと闘病しながらおう盛な作家活動を続け、今年五月には「暗い流  
れ」で新潮社の日本文学大賞を受賞した。絶筆は本紙文化欄の「自伝抄、  
七十にして、新人」だった。  
(読売新聞)

この記事は写真入り四十一行に及ぶもので、病歴と経歴を要領よく  
述べている。

私はこの記事を読んで、まず見出しの「老境の官能」に注目させら  
れた。これは「接木の台」や「暗い流れ」に代表される晩年の諸作に  
はられたレットテルなのであろう。「和田先生に対しては、こういう言  
い方もされていたのか。」と私は胸中でつぶやいた。——「作家和田  
芳恵」、これが第一の顔である。

右の記事に「一葉の研究などで知られる和田芳恵氏」とある。和田  
芳恵というのと、「あの一葉研究の」とだれもが言ったものである。い  
つか会ったとき、「学校の先生はいい、同じことをなんべん話しても  
いいが、作家はそうはいかないからね。」と和田が話してくれたこと

があった。かつては芥川賞候補の作家として文壇にデビューした和田であったが、一般の人々——多少文学に関心を持つ人々は、『一葉の日記』で芸術院賞を受けた和田芳恵として名を覚えていたのである。——「一葉研究家和田芳恵」、これが第二の顔である。

私が和田芳恵に初めて会った日がいつであったか正確には覚えていない。たしか昭和三十二年の早春のころのことで、場所は千代田区役所の階上の集会場での一葉についての講演会の席であった。ちょうど、『解釈』の誌上に「たけくらべ」論を発表し始めた私が講演終了後、「青木です、よろしく」とだけ挨拶したこと、その日は小雨が降っていたことを覚えている。和田は温厚で、やや病身の人のように見受けられた。その後、お宅に伺うようになってから、何やら持薬のようなものを服用しているように察せられた。だから、私の目には和田を病弱な、だいぶのお年の人に思えた。今、年譜をくってみれば、当時五十一歳であり、今の私より若いのであるが、二十五、六の私の目には親と同世代の人はどう見ても年輩者に見えたものであった。その上、たいへん失礼なことに、静子夫人があまりに若々しいものだから、「お嬢さんですか。」と言って、和田を苦笑させてしまったことを記憶している。それは、東京タワーの見える麻布森元町のお宅であった。

和田が肺気腫で大変だと知ったのは、昭和四十七年八月であった。私の所属する解釈学会の全国大会の講師にお願いしたとき、夫人からタクシーに乗せて帰してほしいというお言葉があった。駅の階段を昇

り降りするのがかなりつらいからと言うことであった。

和田と親しかった作家野口富士男は『読売新聞』（昭和五十二年十月七日夕刊）に「和田さんを悼む」という追悼文を寄せているが、その中で、十月三日に病院に見舞いに行ったとき、病室の奥から「うつるといけないから」という和田の声が聞こえて、結局面会できずに帰って来たという文に続けて、

あれほどはつきり口がきけた病人が、正確には五日の午前一時三十二分ではあっても、私のたずねた翌日の四日の夜には亡くなってしまったのである。

誤解をおそれずに言えば、そのことが私にはそれほど意外ではなかった。さらに露骨な表現をさせてもらえば、もっと早く亡くなっても不思議ではなかった。最近の和田さんは、自分でそういう生き方をえらんでいた。

階段を二段ほどのぼりかけると、もう肩で息をしなければならぬほど、和田さんは弱っていた。だれの眼にも最悪の健康状態におかれていたことは明白すぎるほど明らかだったのに、書いて、書いて、書きまくっていた。明日どころか、今晚死んでも不思議はないと、私は外で和田さんに会って別れるとき、いつもそう思っていた。

と書いている。若いころから文学の研究・創作に徹底するところがあつたが、晩年には病気を押し、死と背中合わせのような形で執筆生活が続けていたのである。

北海中学を経て中央大学法学部を卒業後、新潮社の編集部に入る。昭和十六年に退社後文筆生活に入る。二十二年には文芸雑誌「日本小説」を主宰、いわゆる「中間小説」の名づけ親になるが、翌年には廃刊。

前掲の新聞の訃報には、こうある。つまり、編集者として和田が紹介されている。和田の父が新潮社の社長佐藤義亮と郷里での友人関係にあったことから、新潮社に入社し編集部配属されたのであった。

ここに「編集者和田芳恵」の顔がある。和田氏はかつて——たぶん和田と近づきになって間もないころであったと思うが——私の学生時代の師について問うたことがあった。私が国語学の中田祝夫博士の教え子であったことを話すと、和田が「平古止点おことてん」ということがよくわからなくて苦労したという話をしてくれたことを記憶している。これは、和田の入社当時、『日本文学大辞典』を東大の藤村作博士が中心となって作っているところで、和田がさっそく会社側の担当者となつたので、中田博士が平古止点の研究者として知られていたから、博士の名を聞いて、平古止点の思い出話が出たのであろう。それはさておき、こうして和田は文学辞典の編集に携わっているうちに国語国文学界の事情に通じていったのである。その後、昭和九年六月に『日出』の編集部に移り、編集長を務めて昭和十六年に退社している。これは、同年四月、同人雑誌『山』に発表した「格闘」が、昭和十六年上半期芥川賞候補になった後である。

私は、和田芳恵に三つの顔のあることを見てきた。しかし、その他

に和田には教育者としての生活もあった。かつては日本大学芸術学部、続いて共立女子大学の非常勤講師を勤め、四十一年からは土浦短期大学教授として病身を押し通勤したのは、持てるものを若い学生に与えたいという強い欲求があつたことだと思ふ。しかし、和田芳恵の和田芳恵たるゆえんのもの、編集者・作家・一葉研究者としての仕事であつたと言えるのではないだろうか。

### 三 一葉研究の著作

和田芳恵の三つの顔のうち一葉研究について述べてみたいのであるが、ここでは、『樋口一葉』と題する著書と『一葉の日記』をとりあげてみようと思ふ。

#### 1 樋口一葉

前にも引用した「自伝抄」は、次のような文から始まっている。

ちよつとした必要があつて、私は自分の年譜を作つた。それまで、作家で他人の年譜を幾人か書いたときとくらべて、いちばん、わかっているはずなのに、自分のことになるとむつかしいものだと思つた。

風変わりな書き出しのように思えたが、「(この年譜は)よくできているが本音がでていないで、残念でした。」と、丸谷才一が感想を書いた便りをくれたという文につながり、さらに、

年譜を書いてみて気づいたことは、私の多くは、書きおろしの形でまとめたものということだった。

という文が導かれている。要は、「ちよつと必要があつて、年譜を書いてみて、私は書きおろしの形でまとめた仕事が多いことに気づいた。」ということだ。そして、

私は『樋口一葉』という単行本を、五冊だしていた。題名が、みな『樋口一葉』なので、最初に書いた一冊の増補改訂版と受けとられがちだが、それぞれ新しい研究や調査資料を使って、新しい観点から書きおろしたものである。この本のなかで、自分のあやまりを直したり、相手の論敵と一戦をまじえて、たがいに刺しちがえたこともあった。

と続けている。さすがに一葉研究の和田だけに『自伝抄』の第一回に一葉研究のことが書かれている。(しかし、二葉関係のことは、その後は二十三日に軽く出るだけで、その他の日には触れられていない。)

ここで『樋口一葉』のことにもどうろう。和田は同じ題名の、それで内容の異なる本を五冊書いているという。それは、

- ① 樋口一葉 昭和十六年十月二十七日・十字屋書店刊。
- ② 樋口一葉 昭和二十九年七月三十一日・新潮社刊。
- ③ 樋口一葉 昭和二十九年十二月十日・講談社刊。(『世界伝記全集』の一冊)
- ④ 樋口一葉 昭和三十二年九月三十日・角川書店刊。(『角川文庫』)

⑤ 樋口一葉 昭和四十七年五月二十八日・講談社刊。(『講談社現代新書』)

の五冊をさすものであるうか。その他に

『樋口一葉』(昭和二十九年九月十五日・筑摩書房刊・『日本文学アルバム』3)

『樋口一葉』(昭和三十三年十一月五日・角川書店刊・『近代文学鑑賞講座』第三卷)

にも関係しているが、これは編著者ということになるから、五冊の中には入らないであろう。

#### ① 樋口一葉

さて、五冊の『樋口一葉』のうち①は、長い間、私は読めないでいた。戦前の著書であり、すでに入手しがたかつたからである。<sup>注1</sup>この

『樋口一葉』は、和田芳恵の最初の著書であり、

「性格への序章」(『古典復活のひとつの試案として』たけくらべに「ごりえ わかれ道」)「一葉の探求」(「あとがき」)

より成っている。『三田文学』に連載した「樋口一葉」を「一葉の探求」と改め、原稿にも手を入れたものを中心に一冊となったものであるが、刊行にあたって出版元の十字屋書店主酒井嘉七氏からの相談で「性格への序章」を書き加え、それに「たけくらべ」「ごりえ」「わかれ道」の三作品を収めて一書としたのである。

「性格への序章」は、一葉の生涯をほぼたどる叙述の中に一葉の性格を指摘している。その中で、「樋口夏子は自分だけの力を信じ、自

分だけで生きてゆこうとした、強い自意識に目覚めた性格の人間のひとりであった。」としている。そして、半井桃水との間に醜聞がたたため、一葉が桃水と絶交することになり、そのときになって非難する側にあった三宅花圃の仲介で『都の花』に小説を発表することができ、その後『文学界』への執筆の道が開けて行った点について、この場合の一葉は決して花圃を利用しようとしてゐたのではないのである。

だから、花圃も充分に一葉につくことになったのであろう。言ひかへると、ひとを頼ろうとしなかった一葉が同時にひとに頼ることになつてゐたのだと思ふべきである。

一葉の小説の師半井桃水は、一葉の恋人であつたとされている。この桃水を好きになつたことについて、和田は子供の頃の愛読書にもかなりの影響があると推測している。

桃水は草双紙好みの美男子であつたし、対馬国嚴原の産れであつたので、早くから朝鮮に注目し、志士的な熱情から半島にわたつたが遂に計画に失敗し、帰つて小説家となつた男である。

そのやうな男性を好きになつたのも、子供の頃の愛読書にもかなりの影響があるであらう。

これは、一葉が日記に「七つといふとしより草双紙といふものを好みて」と書き残していることなどをふまえての意見であろう。

和田は周囲の女性から一葉はどう見られていたかについて、

一葉は父に可愛がられたやうに、その後も男性の側から賞められる女であつた。

それと反対に母の滝子にあまり好感をもたれなかつたやうに、女性の側からは手きびしい形で非難されてゐる。

と述べている。一方男性からはいかかというところ、幸田露伴のことばを紹介し、

色白く姿やすらかに、かどかどしくいかつげなる方などはいづくにもなくて、(中略)春の樹の小雨にたをやぎたるごとく、やはらかにおとなしき人なりき。(中略)この君、内の才は錐すでに、囊にたまらぬ鋭さありとも、外の姿は米いまだ稔をはなれぬおもむきながらと思ひき。

を引用し、露伴の眼には好ましい思い出を残していることを述べている。その一方、戸川秋骨が「女史のてきばきしてゐるのには、いささか面喰つたことがあつた」という思い出や、馬場孤蝶が体験した、「殿方がお野掛でお出かけ遊ばすのはさぞ御愉快でございませうねえ」のように言う、一葉の鼻についてやりきれないところにも触れている。

そして、「強く一貫している樋口一葉の性格を見出さずには、人及び小説家としての樋口一葉の本質に突きあたるわけにはゆかないのである。」と結んでいる。

この本の第二部、実はこの本の中心をなすのは「樋口一葉の探求」である。前述したやうに『三田文学』に連載したものである。後年

田は次のように語っている。

「戦前、出版社に勤めて日本文学大辞典の仕事をしているうち、だれか作家の研究をしようと思いましたが。一葉のこと調べはじめたんです。一葉にしたのは、早く死んだし作品も少ないから楽だろうというようなズボラな気持ちからだったのだが、それがどうして、ざつと三十年、生涯の半分くらいを一葉のため使ってしまったよ。」

——これほど長くやることになったのは、私が最初に発表した「樋口一葉」がいろいろの人にやっつけられましてね。その批判をやっつけるために、私がさらに調べて書く……という繰り返して、こういうことになったのです。以前の一葉観は、貧乏な中で親孝行しながらりっぱな小説を書いたという、日本女性のカガミとするような見方だったんですね。私がつとしたたかな女性だった、ということ資料をあげながら書いたら、久保田万太郎先生など、腹をたてて、「これから和田がどんな仕事をして認めてやらない」とおっしゃったそうです。繰返し持説を書続けているうち、久保田先生も私の考えを認めて下さるようになって……<sup>注4</sup>

和田自身の回想のことばから、最初の『樋口一葉』に対する風当りの強さを推測することができる。それは従来の一葉観に反する和田の論説が非難されたということであるが、和田自身は、「素直に言ふと、樋口夏子といふ永遠の女性に惚れつくってしまったらしい」というほど一葉にうち込んで、和田「だけが知ると思はれる一葉」を「心の隅に成長」させていったのであった。そして、

樋口一葉の日記と作家一葉を不朽のものとすると信ずる「にこりえ」「たけくらべ」「わかれ道」をおもな範囲として骨格を作りあげ、これにわたくし流の肉付けをしようと思ふのである。という方針で、この文章は書き始められる。以下、注目すべき意見を拾ってみよう。

まず第一は、天才の名に値するほどの傑出した日記と作品を残した秘密を「偏愛による独断をさけながら」解いてみたい、「一葉の日記及び作品に巢食ふ心理の流れを捉へながら、科学的方法を確立してゆくつもりである。」という宣言。これは、和田の一葉研究に対する大方針となっていたのである。

第二は、一葉日記は、一葉自身が「もとより世の人にみすべきものならねば」と書いてはいるが、「誰かの目に触れるといふことも潜在意識では予想されてゐる」と考え、「だから、わたくしは一葉の日記に書かれた事柄を全部事実として汲みとらうとはしない。」という考え。一葉日記を読むと当然書かれてしかるべきことの記述が欠落していることがある。また、ある説明が省略されているため、ある事柄が「衝動的とおもわれるほど突発的に述べられ」ていたりすることが指摘されている。

第三は、「一葉は『わかれ道』のお京に同情的であり、また『にこりえ』のお力の生き方に、作家としてさざげられるだけの共感を示してゐる。」という指摘。この理由として、

これは一葉が人生の悲痛面にふれたからではないのである。ま

た、結果はともかくとして弱いものの味方を企図したのでもないのである。

お力と言ふ女のむなし恋の中にあるやるせなさに一葉は、桃水との関係をたつてしまつてゐるだけに傾けた同情を寄せずにはをられなかつたのであらう。

と述べている。

第四に、一葉は桃水と深い関係があつたということ。一葉は桃水を恋していたとは一般に認められているが、それ以上の関係はなかつたとされている。一葉を永遠の処女と見たいのは、一葉ファンの心情であつた。学生時代、講義の中で吉田精一博士が一葉非処女説に触れたことあつたが、その後、いろいろの本を読むと、その点を明らかにしたものはなかつた。しかし、和田は昭和十六年の時点で、

いつの日かいつの夜か、半井桃水によつて女の誇りを失つてしまつた、その時から、もう、肉体だけは生きてゐても、心はどうに死んでしまつてゐたのである。

と言ひ切っている。また、別の所で「半井桃水がそんなに一葉がわたくしのことを思つてゐたとは知らなかつた。と、一葉がなくなつてからある講演でのべてゐる。この事を何の疑ひもなく承認するものがあつたとしたら、少なくとも作家桃水はずかしめるものであらう。」と言ひ、いかに通俗作家であらうと、作家の眼をもつ桃水が、一葉の思いを見逃すわけがないとしている。

第五は、「一葉は一番重要なことを強いて語らなかつた人間のひと

りであつた」ということ。その適切な例として、一葉の死因になつた結核について日記の中に一行も触れていないことをあげている。

自分の命を奪ふ病氣について一行半句も書きとどめなかつた一葉が、女の誇りを失つたことについて述べなかつたのはあまりに当然なことである。

第六に、「肉体の秘密を桃水によつて知つた……これを解き得る鍵は一葉の傑作といはれる『にぎりえ』『たけくらべ』『わかれ道』の中にある。」としたこと。

この一聯の不朽の代表的傑作は、みな、倫落の境涯に身を置く人たちに題材を求めている。これは一葉自身をわれわれが覗き得る内面生活の表現とも見られよう。

一葉の傷ついた高い精神は墮落するという形を借りるときのみ、そこに魂の憩ひを見出してゐたのだ。

と説いている。

以下、和田は桃水と一葉の関係を一葉日記によりながら論じていく。私自身も一葉日記抜きに一葉を考えるわけにいかないが、和田にとつて一葉日記は大切なものであつた。やがては、芸術院賞を得た『一葉の日記』へと結実していくほどのものだ。

第七に、「一葉はもっとも巧みな嘘つきであつた。」ということ。

言つてよい時に言ひ、言つてはならぬことは言わぬ、一葉の態度は、開放的でない女のひとつの特質であらう。(中略)

事実が、どんな時に語られたなら効果的であるか、また、どんな



時に語らねば真実が生きるか、と言ふことを知っている一葉は、人間としては決して大きくなかったけれども、作家としては、この手法を見事に短篇形式の中に生かききってしまった。

「この意味で一葉はもっとも巧みな嘘つきであった。」と言うのである。

右のような見解・立場に立って、以下一葉の作品と人生が語られているのが「樋口一葉の探求」である。

## ② 樋口一葉

『樋口一葉』の二冊目は、昭和二十九年七月三十一日、新潮社刊。

「一時間文庫」の一冊である。この本は、「三人の恋人」「借金哲学」

「作りあげた家系」「下谷龍泉寺」「丸山福山町」「奇蹟の期間」の六章からなっている。

冒頭の「三人の恋人」というタイトルにまず驚かされる。「一葉には三人も恋人がいたんですか。」と驚いて私に問うた人があったのを忘れられない。

一葉が残したおびただしい草稿を読んでゆくと、考えに疲れ、思いにくれたときの、ふとした落書がある。その中にきまって出てくる現在の男性の名は、半井桃水と渋谷三郎、それに野尻理作。べつたりとした筆の跡は、なやましく一葉の思いを伝えて、見る人の胸を打つ。

思わぬところで人間は本音をはくものだから、これが青春のなかつた樋口夏子の忘れたい人の名といえようか。

と書き始めるが、和田は、桃水・三郎・理作を一葉の心に残った男性として、三人との交流を述べ、

落書にあらわれた本音が、一葉の小説で、どんな形をとるかは、のちに述べることとして、「ゆく雲」の柱次のモデルは理作であり、「この子」の山口は三郎、「にこりえ」の朝之助は桃水だだけいって置こう。

渋谷三郎で感じた男性の愛情に対する不信の情は、いつも、夏子を相手の男の態度や言葉を警戒的に考えるようにした。

だから、女の心理を書き尽すことができて、男を描く力の不足を、一葉の小説が感じさせるのであろう。

と、この章を結んでいる。

「借金哲学」の章では、一葉の苦しい金策事情を述べているが、借金するにあたって、

夏子は、どんな男からでも金を借りようとはしなかった。また、決して誰に対しても、自分の弱点は見せなかった。

あまく、温かい人情型と、投機性をもった俗人型のふたつに限られている。

この二つの人間タイプは、長兄の泉太郎と父の則義に拠つたものと考えられる。男性への女性の入口は、父や兄弟に遡ることができよう。

としている。

「作りあげた家系」は、冒頭に一葉の父が南町奉行所配下八丁堀同

心浅井竹藏の株を買う直前と思われる慶応三年六月の親類書の写しをあげて、考証している。父則義が生国を武蔵としたり、祖父権左衛門を御当地浪人、父八左衛門も御当地浪人とするのをはじめ、家族も泉太郎・虎之助・ふじくらいが正しいだけで、その他は作爲の所産であることが指摘されている。和田はこうも書いている。

この外に則義が、その度に、その場に都合よく作りあげた書類が沢山残されていて、どれを信じて良いか判断にこまるほどだが、書いた本人の則義も、写しがなければ、後で思い出すことができなかったためだろう。

こうした虚偽の親類書を作り、故郷の大先輩真下専之丞の連帯保証のもとに、一葉の父は八丁堀同心の株を得たのだった。そして、明治になっては、東京府や警視庁の属官として勤めたが、「明治九年から二十一年までの期間は、……実質的には金融業者であった。……夏子は、父が死ぬまでの成長期を、中産階級程度の生活をした。」と和田は書いている。

「下谷龍泉寺」は、原稿料では生活できないので、龍泉寺で小店面開いたことが書かれているが、この章で最も注目されるのは、一葉一家の龍泉寺在住の明治二十七年四月に山梨の樋口家の跡を継いでいる樋口幸作が悪疾にかかって上京し、上野桜木町の桜木病院に入院し、七月一日に亡くなったことである。一葉は、「浅ましき終を、ちかき人にもみる。我身の宿世もそぞろにかなし。」と従兄の死に際して思ったと記している。和田は、幸作の死病を近年まで不治の病とされていた病

気とみたのであった。

明治二十七年一月に、幸作の便りを見てから、夏子は幸作の病氣を知った。そして、自分にもそんな運命が訪れると考えた。おびえた夏子は、すぐ身近に死魔の足音がせまっていると思った。

ぐずぐずしてはいられないと焦った。(中略)

幸作事件を契機に、一葉は世のつねの女の幸福と考えられる結婚生活を断念した。

その結果、最も短期間にすぐれた小説を書くことができた和田は言っている。

「丸山福山町」は、小説「暗夜」を『文学界』に発表したことから、一葉の病没までの、つまり丸山福山町時代を語っている。「『暗夜』は、末世的な政治に対する痛烈な抗議を盛った社会小説であった。この小説は、我が志は国家の大本であると思った、かいなき女子の一葉が具現した世界であった」とし、「暗夜」は気負いたった失敗作だが、『文学界』の青年作家達に、仮りにお蘭の姿をかりて、ちらっと一葉は素肌を見せたと指摘している。一葉と『文学界』とは、「暗夜」を契機として結びつき、数々の名作が発表されていった。そして、名聲と引きかえに死の床についたのだった。この章の結びに、

一葉はついに現実的にむくいられる事のない人生の苦行者であった。

夏子は愛情の底にさえ、物欲がつきまといっている世の中に突きあたって、その体験から心理的現実主義の手法を近代文学の上のうち

たてた抒情詩人であった。  
と書いている。

「奇蹟の期間」とは、明治二十七年十二月に「大つごもり」を発表し、『文学界』に連載していた「たけくらべ」を結させた明治二十九年一月までの十四か月のことである。この期間に右のほか、「ゆく雲」「にぎりえ」「十三夜」「わかれ道」などの名品が集中的に発表されている。和田は、

二十三歳の十二月以後の十四箇月がなかったならば、一葉の存在価値を文学史に見出すことができなかつたろう。

それが明治の全作家の作品とくらべても、優に傑作と思われる第一級の作品が残された。

と評価している。この和田のことばにより、一葉における「奇蹟の十四か月」の呼称が生まれたのであった。

#### ③ 樋口一葉

『樋口一葉』の三冊目は、昭和二十九年十二月十日、講談社刊。

『世界伝記全集』の一冊で、書きおろしである。（この作品が、和田の言う五冊の中の一冊とは断定できない。他の四冊と異って本書だけが伝記というのも気になるが、他に同名の書が見当らない。講談社現代新書『樋口一葉』の「あとがき」には、「この『樋口一葉』で、私は四たび一葉に就いて、書きおろしの単行本を出すことになった。」とあり、何冊ということばの使い方は、はっきりしない。）

#### ④ 樋口一葉

『樋口一葉』の四冊目は、昭和三十二年九月三十日、角川書店刊。角川文庫の一冊である。これは、前出の新潮社版一時間文庫『樋口一葉』に三編の既発表の論文を加えて一冊としたものである。

その一は、「大吉あやめ考」（昭和二十八年『文学』十一月号発表）。一葉の父則義、母滝子が幼名を大吉、あやめと言ったことから説き始め、両人の生い立ち、なれそめ、それから江戸への出奔、江戸での生活から死までが述べられ、樋口家の立派な家系が語られたことが書かれている。この論文では、一葉の両親が江戸に出て、二人しての苦勞とそれに見合った成功と晩年の事業の失敗までが詳しく論じられている。

その二は、「一葉と母の香典帳」（昭和二十九年『文学』四月号発表）。「半紙四つ折、八ページ分の、筆で書いた帳面が、一葉の香典帳であった。綴じ糸の抜け落ちた痕があり、表紙は散逸していた。昭和二十八年の暮に樋口家から出た。その内容は――」で始まる。およそ論文という体裁を整えていないかに見える書き出しで、次いで「金壹圓 天野」以下六十六口の香典・供物が記録され、次いで当時の貨幣価値を知るための米の値段の考証（平均米価一升十一錢九厘とのこと）、香典を包んだ人の考証が続く。次いで、母滝子の香典帳と、その考証・解説、さらに一人残された一葉の妹邦子が吉江政次（後、樋口姓）と結婚するまでのいきさつが書かれている。

その三は、「一葉家系考」（昭和三十一年四月、『明治大正文学研究』十九号発表）。題名の通り樋口一葉の父母の家系をさぐり、一葉に至

るまでを考証したものである。昭和三十年五月、塩山市の秦一郎家から、宝永四年・正徳三年・享保八年の甲州山梨郡栗原筋中萩原村宗旨改帳あらためどぎと水帳みづじょうを発見し、発見時としては一葉の父系・母系を示す最古の文書と考え、樋口家は「宝永から正徳にかけては勘右衛門、享保頃には市郎右衛門」といったとしている。その後、樋口家当主が八左衛門と名のつた事情と世襲のこと。一葉の父則義の手記を考証すると、遠祖は信濃の樋口兼光の末流ということが述べられている。次いで、一葉の父の名が載っている最古の公文書といえる「嘉永三年戊三月、中萩原村宗門人別帳」とその解説。そして、その中に出ている一葉の祖父の説明から、その友人藤助（後の真下専之丞）の話に移り、一葉の父母が真下を頼って上京したこと、一葉の父が直参の株を買うときの親類書とその解説をしている。そして、その親類書は「文字通り正しいのは、長男の泉太郎と次男の虎之助、娘とある長女のふじだけ」であり、「庶民が士族になりあがる方法」を最も具体的に示している。」としている。この論文の「一葉の文学が、古い世界から新しい世界に足をかけることができたのは、与えられた家系を、自分のものとするために、どう生きたかにかかっていたといえよう。」という結びの文は、一葉の生き方を端的に指摘したことばである。

#### ⑥ 樋口一葉

『樋口一葉』の五冊目は、昭和四十七年五月二十八日、講談社刊。講談社現代新書の一冊である。序文によれば、『一葉が一葉になるまで』その根源にさかのぼって、私流に考えてみようという気になっ

た。」という。

内容は、

第一部―一葉が一葉になるまで―小説家の誕生

第二部―一葉のせおったもの―「家」と時代と

第三部―小説のうちとそと―一葉の世界

たけくらべ 全文・注釈つき

という構成になっている。

第一章註は、寺子屋の筆子であった則義が、一葉を、どのように教  
育しようとしたかという観点にたつての考察である……。第二部  
は、一葉を生んだ父母の郷里にさかのぼり、江戸時代の封建制に触  
れながら、その窮屈な枠組からの脱出を、具体的な例で示そうと心  
掛けた。……第三章註は、古風な教養を身につけ、「家」の重庄をう  
けた一葉という若い女性が、どのようにして、小説家になることが  
できたかを辿たづった。

と和田は序文に書いている。そして、さらに

貧困ということが、一葉の小説でも重要な主題になっていた。一葉は、自分もくるめた女の弱い立場から、社会の仕組みを見ていた。このなかで泣き寝入りしない、冴えた眼を一葉は持っていた。一葉の、すぐれた小説のなかに出てくる色恋沙汰も、かならず金銭とまつわりついている。晩年の一葉が、どのような小説世界を築こうとしていたかを知れば、女性の解放を目ざしていたのだというこ  
とになる。

と続けているが、以上で、本書の概要を知ることができよう。

## 2 一葉の日記

### ① 一葉の日記

和田芳恵を一葉研究者として不動のものにしたのは、芸術院賞を受賞した『一葉の日記』であろう。『自伝抄』（八月二十三日付）には、こうある。

私があとで、古田晁社長から聞いたところでは、筑摩書房は、そのころ赤字が多くて給料も遅配になっており、どうせつぶれるなら、『樋口一葉全集』を出して見たいというのがほんとうのところだったらしい。

土井一正の言葉に感動して、私は、半年で終るはずの『一葉全集』（塩田良平と共編、全七巻）を終えるまでに足掛け五年かかり、昭和三十一年の六月に完了した。私は、この五年間、山梨県の大菩薩の山麓に近い中萩原村を中心に、一葉の祖先のあとを調べていた。書きおろしで書けば、五千部は出版してくれるという約束であった。

私は、この四百字七百枚ほどの原稿『一葉の日記』を書くのに、一年かかった。編集費が安いので、その少しの穴埋めだと土井編集長が言ったのに、内容がむずかしいので、二千部しか出せないという。私は、はげしい怒りがこみあげてきて、「そんなら、五百部でもいい」と言い、編集長は「五百部では、ページあたりの組み賃がた

かすぎて……」、「限定版なら、全国で五百部は、はけるというが……」

これが五年間、いっしょに苦労をわかちあった二人の最後か、と私は思ったが、土井編集長も同じことを考えたにちがいない。三千部というところで、妥協したが、この『一葉の日記』で芸術院賞を受けた。

右の文章で執筆の事情、出版に至るまでの経緯が明らかである。つまり、『一葉の日記』は、『一葉全集』（昭和二十八年八月～三十一年六月刊）の編集の副産物であった。

この本は、「序説、十六歳から十九歳まで、二十歳、二十一歳、二十二歳、二十三歳、二十四歳、二十五歳、人と時代、あとがき、索引」から成っている。「序説」では、樋口家に残る「日記ひかへ」にある日記の目録に始まり、妹邦子による日記の保存から出版に関する事情までが述べられている。「十六歳から十九歳まで」から「二十五歳」までは、年齢に従って、一葉の日記をふまえての一葉評伝となっている。一葉についての新しい研究にもとづいた書き下ろしであった。

幸いにも『一葉の日記』は、昭和三十一年度の芸術院賞を受けたが、和田は

私は、幸いに名もないひとりのちまた（巷）の研究者だから、名もない多くの人たちの仲間を持った。そして、番号で呼ばれる程度の、これらの人たちは、脚光を浴びて舞台上に踊る少数の人たちよりは、ほんとうに着実に、せいっぱいの思いで生きているのを見

た。これらの人たちに教えられることが多くて、やっと、私の樋口一葉ができた。(中略)

どうせ、もう、五十歳もすぎると。私は長いあいだに身についたきょうじん(強靱)な身構えで、平凡な男にあらがちな、はでな色彩のない暮しから、なにかをやってゆきたいと願っている。

名もない雑草でも、たしかに、季節がくれば、柄相応の花を咲かせることはあるのだ。

と、『朝日新聞』(「芸術院賞を受けて」昭和三十二年三月六日)に書いている。「名もない雑草」と自称する和田の「柄相応の花」がすなわち『一葉の日記』であり、「私の」と言い切れる「樋口一葉」が描かれたのであった。

## ② 『樋口一葉の日記』

筑摩版『一葉の日記』は、「二十年近くかかった一葉研究の総決算のつもりで、一年ほどかかり、こつこつと書きおろしたものである」<sup>注</sup>けれども、それには原型のような書物があつた。それは十字屋書店版の『樋口一葉の日記』(昭和十八年九月刊)である。この本は、「序章」「二十歳の日記」「二十一歳の日記」「二十二歳の日記」「二十四歳の日記」「二十五歳の日記」「終章」から成っている。それに、冒頭には川端康成、小島政二郎、林芙美子の序文が収められている。

康成はこう書いている。

一葉の日記を解説しつつ一葉の人と芸術とを論究してゆくという和田の仕事は、一葉にとっても和田にとっても、言はば運命の神の

導きのような因縁の所産であつて、そのために一葉は天上の光を添へる一方、俗塵の裸をさらさうとも、愛慕に憑かれた和田氏の爪牙から逃れる事は出来ない。(下略)

「日記を解説しつつ一葉の人と芸術とを論究してゆく」和田の方法はこの本に始まり、筑摩版に引き継がれている。

小島の序文は和田の人となりに触れつつその仕事について述べている。

(前略) 和田芳恵君は、「一葉女史探求」を以つて文壇に出現した小説家である。熱すると、「天才か狂人か」分らなくなる性格の持ち主である。現在一葉に憑かれてゐる点に於いて、恐らく和田芳恵君の右に出づるものはあるまい。一葉に関する限り、どんな微細なことを尋ねても、彼は微笑を湛へながら、掌をさすが如き明答を繰り出して倦むところを知らないのである。(後略)

芙美子は、

一葉と云ふひとは貧しい暮しをしてきたひとでありながら作品のなかには、少しもそんな匂ひが感じられなくて、二十五歳で亡くなつた若い作家のせみか、初々しいものばかりが残つてゐる。和田氏がどうした機縁で、一葉に心根をかたむけてをられるのか不思議に思ふと同時に、一葉といふひとを大変羨しく考える。(後略)

と書き、さらに「若い女の作家の悩み」を知りたいし「一葉の本当の生活を日記の中から」すくいとりたいと結んでいる。三者三様に和田の仕事に対する分析・評価・希望をくみとることが出来る。

また、和田は「あとがき」の中で、

私が樋口一葉をひとつの仮説のもとに探求しつづけてから数年になる。そのうちにいくつかの一葉の仕事に関係した。

私の仮説はつねに人間のもつ弱点に基準を置いてゐた。それは今もなほかはりがない。

天才の高さを知るにはこの道よりほかにはないと信ずるがゆえである。

この本を書くにあたって、自分のこれまでの過誤を改めた。それと同時に、何等の顧慮をも払はずに先人の説にも鋭い刃をむけた。

と書いている。一葉研究の姿勢を知ることができる。特に研究の進展とともに「これまでの過誤」を改めていくことや、「何等の顧慮も払はずに先人の説にも鋭い刃をむけた。」という厳しさは、私の眼には温厚と映った和田の心の底にあった厳しさであつたと思う。

### 3 全集・作品集・研究書の編述

前述の1・2の節で述べた著書のほか、多くの一葉論があるが、ここでは、全集・作品集・研究書の編述について列挙しておこう。

樋口一葉研究 昭和十七年四月十五日 新世社刊。

昭和十六年七月から十七年四月にかけて、全五巻・別巻一として新世社から刊行された『樋口一葉全集』の別巻。現在の個人全集の別巻へ研究資料編Vのはしり。

一葉全集（全七巻） 昭和二十八年八月～三十一年六月。塩田良平

と共編 筑摩書房刊

一葉青春日記 昭和三十一年十月三十日刊 角川文庫

一葉恋愛日記 昭和三十一年十一月十五日刊 角川文庫

樋口一葉（「近代文学鑑賞講座」第三巻） 昭和三十三年十一月五日

角川書店刊 「樋口一葉の人と作品」 「本文および作品鑑賞」

等を担当。「樋口一葉の窓」には「一葉の日記・書簡―秋月と田口氏についての考察―」を収めている。

樋口一葉読本 昭和三十三年十一月三十日 学習研究社刊。「近代

日本文学読本」の一冊。（これは三十九年六月に『樋口一葉の人と作品』として改装・改訂版として出版される。）

樋口一葉集 昭和四十五年九月（日本近代文学大系8） 八解説・

注釈V 角川書店刊。

樋口一葉集（明治文学全集30） 昭和四十七年五月 筑摩書房刊

樋口一葉全集 塩田良平・樋口悦と共編 筑摩書房刊。第一巻へ小

説上V昭和四十九年三月、第二巻へ小説下V昭和四十九年九月、

第三巻・上八日記I V昭和五十一年十二月、第三巻・下八日記

II・随筆V昭和五十三年十一月、第四巻・上八和歌V昭和五十

六年十二月。（未完）

これらの編集には、和田の一葉研究への情熱とあわせて、和田の編集者としての才能が生かされていたとみるべきだろう。

## 四 結 び

和田は芥川賞候補となり、後年直木賞を受賞した作家であった。その作家的資質をもって、一葉日記を中心に丹念な調査とユニークな考察を下して、一葉の伝記的研究を深化向上させたの研究者であった。

最初の研究である昭和十六年刊の『樋口一葉』で人間一葉に鋭く迫り、『樋口一葉の日記』（昭和十八年刊）以下一連の『一葉の日記』と題する著述で一葉の日記を資料として一葉の生活と心情そしてその生涯と文学を研究し続けた。一葉についての最後の著書となった『樋口一葉』（昭和四十七年刊、講談社現代新書）の「まえがき」の中では、晩年の一葉が、どのような小説世界を築こうとしていたかを知れば、女性解放を目ざしていたのだということになる。

と書いている。これについて、松坂俊夫氏は「和田の至り着いた一葉観が呈示されている」としている。私は、

一葉は小さいとき父から教えられた立志という一本の道を追いかけて死んだ。<sup>注8</sup>

という一葉観も捨てがたいのだ。

（私は、この小文において和田芳恵の人と一葉研究について通観してきたが、まだその一面に触れたのみである。和田の著述目録を作成してみると、単行本に収められていない短い文章がおびただしくある。実は、そういう文章にこそ和田の真意が託されていると思う。そ

これらの検討、さらには創作の研究を次への課題としてペンを置く。）

## 〔注〕

- 1 昭和十六年十二月刊の『樋口一葉』は、入手しにくい書物であった。
- 2 昭和十五年六月・七月・八月・九月・十月・十二月、昭和十六年一月・二月・三月・四月・六月・七月・八月の各号（計十三回）に連載。「あとがき」は十六年九月号に発表した『樋口一葉』雑感である。
- 3 日記「塵之中」（明治二十六年七月十五日から八月十日までの一葉の日記）の余白に書き綴った自伝抄的文章で、草双紙を好み、中でも「英雄豪傑の伝、仁俠義人の行為などのそぞろ身にしむ様に覚え」たとある。
- 4 昭和四十四年八月二十六日付『読売新聞』△愛の歪み▽「著者との一時間」。『愛の歪み』は昭和四十四年七月二十五日、中央大学出版部刊。
- 5 「第一章」「第三章」は、「第一部」「第三部」の誤りである。
- 6 昭和三十五年六月刊の『樋口一葉伝——一葉日記』（新潮文庫版）の「あとがき」
- 7 樋口一葉研究案内（鑑賞日本現代文学2 樋口一葉）昭和五十七年八月、角川書店刊所収）
- 8 『樋口一葉』（講談社現代新書）